

# 反障害通信

22. 9. 18

123号

## ファシズム論再論——いくつかの修正と補足——

はじめに

「反障害通信」の118号の巻頭言で「そもそもファシズムとは何だろう？」を書きました。分かりやすさを求め、そして、インパクトを求めて「ファシズム度数」というようなことで、どこをどう攻めていくのかという政治的な指向があったところでの、図式化のようなことです。書きながらすでにいろいろな不備なり矛盾のようなことを感じ、そもそも図式化の弊害ということも押さえていたのです。そういうところで一部注釈もつけていましたが、やはり、訂正しておく必要性を感じていました。

そういう中で、7月8日に安倍元首相の射殺事件が起きました。安倍元首相のファシズム的政治の中での、旧統一教会というこれもファシズム的動きとの共鳴、旧統一教会が安倍元首相を政治的広告塔として担ぎ出したところでの、旧統一教会の被害への反作用という、ブーメランのような内容があると押さえていました。ですので、わたしのファシズム論を早急にきちんと整理しておかねばならないという思いを強くしていました。そこで、やっとこの「校正と補足」に至り尽きました。

### 修正点

さて、修正点です。

#### (1) 「ファシズム度数」を出そうとしたことの撤回と反省

「はじめに」に書いたように、そもそも日本の中のファシズム的動きを出すことによって、どこに焦点をあてて対峙するのかという強いられる政治性のなかで、ファシズム度数という概念を持ちだして比較しようとしていました。

しかし、数量化すること自体の問題があります。たとえば被害の死者数を出すことによって被害の大きさを突き出し批判することが行われます。ただ、被害はその当人と周りのひとたちにとって、一分の一なのです。また、被害比べ、不幸比べのようなことへの批判もあります。それぞれのつらさには個有性があり、比較の困難性があり、また数量化していくことの弊害があるのです。個々の具体的被害から押さえていく作業が必要になって来ます。

#### (2) ファシズムの共通基盤の押さえと色々なモーメントがあることを押さえ直す必要

まず、ファシズムにはいろんなパターンがあると押さえているのですが、ファシズム規定するときの共通基盤（普遍性）のようなことがあり、そのことと色々なモーメントがあることをごっちゃにして前の論攷では論じてしまっていました。その共通基盤と色々なモーメントを区別する必要をとらえ返していました。

共通の基盤とは、ファシズムが全体主義とも訳されることがあるように（註1）、全体の利益を個の犠牲の上に立てるということがあります。もうひとつは、封建時代とも言われ

る時代や専制主義の体制とは区別されて、単なるむき出しの暴力支配ではない、共同幻想的なイデオロギーが働いているということです（註2）。これは、ナショナリズム（国家主義、民族主義）や、超国家主義や超民族主義としてのレイシズム、差別主義などいろんなモーメントがあります。なんらかのイデオロギッシュなこと、別の言い方をすると共同幻想的なことが働いているということです。

#### ファシズムいくつかのパターン（補足1）

さて、わたしは全体主義とかファシズムとか言われていることを、全体主義ということにはファシズムのひとつのモーメントとして押さえ、ファシズムと総称することにしています。その上で、ファシズムと言われていることを前項で共通基盤があると押さえたところで、その色々なパターンとして、ナチズム・ファシスト党・スターリニズム・ボナバルティズム・日本型ファシズム・カルト（註3）的宗教ファシズムと押さえ直しています。

いくつかは、歴史的事実として衆知のことですが、ナチズムはヒットラーが引っ張ったドイツ・ファシズム。イタリアのムッソリーニが率いたファシスト党はファシズムと総称されることの語源となったことです。スターリニズムは、社会主義社会の実現を目指すしながらも、プロレタリア独裁が党独裁に至り、一国社会主義建設は可能だとしつつ、結局国家資本主義に歪曲された、全体主義国家。ボナバルティズムは、マルクスが『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』で示した、後進国ファシズムとも言われるカリスマ的指導者に率いられたナショナリズム、超ナショナリズム的国家形態。日本型ファシズムに関しては、次項に述べます。カルト的ファシズムとは、宗教的粉飾をこらした個人崇拜的なことも含んだファシズム的な動きです。これは、日本型ファシズムの国家神道的なことや、旧統一教会の動きなども押さえたところでの（註4）、またアメリカの福音教会右派の創造説的なことを突き出す宗教右派のカルト的動きを押さえたところでのファシズム規定です。これはトランプが宗教右派と結びついたアメリカファースト的なところでのトランプファシズムとも言うべきことを見据えています。

#### 日本型ファシズム（補足2）

『全体主義の起原』を書いたアレントは、日本型ファシズムについて言及していません。また、日本型ファシズムのファシズム規定には異論もあるようです。これは天皇制ファシズムとも言われていること、そこには国家神道と言われている宗教的粉飾がなされています（註5）。そのようなところで、カルトとファシズムの関係が押さえにくいところで押さえそこなったのかもしれませんが、また、アメリカの福音教会派右派のファシズム的動きもファシズムというところからのとらえ返しもなされてきませんでした。そして、旧統一教会についても然りです。

これらのことは、神話と宗教の教義との関係からとらえ返しができます。神話を物語として語るのとは文学です。それは論理的に考えると創作の世界でフィクションです。大方はそれですんでいたことを、真実として黒を白と言い含めることとして出てきます。それがまさにファシズムなのです。

日本においては、現人神として天皇とか、神道の神話を真実として洗脳していきました。それが日本型ファシズムとしての天皇制ファシズムなのです。そのことは、靖国神社や日本会議や国家神道として未だに生き続けています。歴史修正主義の流れも出てきています。

これらのことを徹底的に批判していくことが必要になっています。

もうひとつ書いておかねばならないのは、支配の思想に親和的な儒教的精神とか、国家（主義）ということにとらわれてか、そういったところで、批判が批判として成り立たないということも起きています。安倍元首相の銃撃事件のときの野党の「哀悼」とか言う文言が、国葬とかいうことをゆるしてしまうことに繋がっていきます。今、一番問われているのは反ファシズムであり、反国家主義なのだわたしは思っています。

#### まとめ

一応、修正と補足の作業を試みえました。すでに、いくつかの個別ファシズム論的なことも突き出しています。まだ、補正や補足が必要になるかも知れません。また、いろいろ肉付けしてく作業も必要になってきます。いろんな意見・批判をもらうなかで、成し遂げていきたいと思っています。

#### (註)

1 わたしは、ファシズムということで全体を統括していて、全体主義はその共通基盤のひとつとして、前論文で論じようとしていて、包含関係まだ出していたのですが、包含関係はファシズム度数として出そうとしていたことから来ていることで、とりあえずそのことは撤回したので、包含関係も留保・撤回しておきます。

2 イデオロギー的なこと、共同幻想的なことは、そもそもマルクスが国家＝共同幻想規定として突き出していることで、そのことがナショナリズム（国家主義、民族主義）とリンクしていくことなのです。

3 カルトとは、教徒は信じているけれど非教徒は論理的にありえないことと知っている、教徒の教条にとらわれた宗教的集団とわたしは押さえています。

4 旧統一教会の流れの教義は、アダムとイブという旧約聖書の神話的なことを持ち出し、韓国をアダム国家、日本をエヴァ（イブ）国家と規定し、性差別的な内容をもったカルト宗教です。もう一つ、押さえておかねばならないのは、1965年の日韓条約で、保障の問題は解決済み（註6）ということへの、韓国民衆の批判に乗っかりつつ、日本信者からの献金や靈感商法、合同結婚式などでの、貢ぐことを正当化しています。そこには韓国ナショナリズムにも乗っかる、ファシズム的モーメントがあります。更に、もう一つ押さえておかねばならないのは、日本の右派政治家は、「解決済み」という主張をしているのに、一方で、旧統一教会の補償としての献金や合同結婚式などを導き出す教義をなぜ容認できたのでしょうか？ 安倍元首相は、旧統一教会と一時距離をおこうとしていた節があるのですが、祖父の岸元首相の旧統一教会との勝共連合での結びつきを反共ファシズム的なところで再構築していたようなのです。

5 国家神道は、ギリシャ神話とも類比される多神教の天照大神信仰の神話的宗教で、そのようなことを近代合理主義の社会に持ちこむとカルトになります。まさに、それでも押し通さんとするとファシズムのイデオロギーになっていくのです。

6 そもそも日韓条約は、東西の冷戦構造のなかで、東アジアにおける反共の砦を築くために、アメリカの圧力下で結ばれた条約、しかも韓国は軍事独裁下でした。補償が被害民衆にとどくことなどなかったし、そもそもいろんな被害がまだ顕在化していなかった時代でした。だから、「解決済み」ととても言えるようなことではないのです。だから、繰り返

返し新たな補償の議論もお金も動いていたのです。また、そもそも日本が戦争とファシズムの時代の総括をきちんとなしえず、天皇制を戦争と侵略の責任を問わず遺し、軍国主義の象徴であった靖国神社を存続させたばかりか、政権与党の政治家たちが集団参拝している（「謝罪」をリセットしている）現実があります。そもそも、補償は謝罪とセットになっていることで、謝罪なき補償になっています。過去の政権や与党からいろんな談話という形で、「謝罪」なることがでてきたのですが、閣僚や政権与党の幹部からそれをリセットするような発言が繰り返され、そして靖国詣でもなされ続けています。だから「解決済み」とはとても言えないのです。

(み)

（「反差別原論」への断章）（52）としても）

## 読書メモ

いよいよ「廣松ノート」の学習とメモ取りに入ります。もとより、読書計画をそこに集中するわけではありません。いろいろな宿題を抱えていて、そこで学習する必要がある本を同時並行的に読んでいきますし、他者との対話の中で読む必要になる本も読まねばなりません。また読み落としている本を、間に挟んだりもします。「廣松ノート」の最初は『唯物史観の原像』です。今回、他の読書メモは、読み落としていたハンナ・アレントの本、以前に書いたファシズム論の修正に迫られ、巻頭言を書くにあたって、対話的に参考にした『全体主義の起源』のアレント関係の読書メモです。ここ何回か読書メモにあわせて巻頭言を書くというような体でしたが、今回は巻頭言に合わせて、本・雑誌を読んだとなりました。アレントの本はもう何冊か積ん読しているのですが、アレントはなかなか共鳴し得ません。一旦又お休みです。

たわしの読書メモ・・・ブログ 600 [廣松ノート (1)]

### ・廣松渉『唯物史観の原像』三一書房（三一新書）1971

前から予告していた「廣松ノート」を開始します。

廣松さんはマルクスの流れから出てきたひとで、マルクスの理論を継承・深化させようとしたひとです。理論の世界から闘争を継続させたと言ええるようなことです。最終の学者・教員経歴としては東京大学院で科学哲学の講座を担当していました。そのマルクス研究は、世界的にももっとも留目される内容だとわたしは押さえているのですが、日本語のマイナーな性格から、そして世界的なマルクス葬送の流れの中で、歴史の中に埋もれてしまうのではと、その理論を学んだ立場で、何とかその理論に共鳴し継承・展開しようとするひとが出てくることを願って、この廣松ノートを書こうとしているのです。

廣松さんは、廣松シェーレ（廣松派）とも言われるような、廣松さんから学的に影響を受けたひとを生みだし、共著もいろいろ出して、シェーレというようなことを作り出しています。

そもそも、わたしが廣松理論の継承を口にすること自体が「大風呂敷を広げる」ような

ことなのですが、運動的なところから理論を問題にしているわたしにとって、むしろ廣松派のひとたちが殆ど問題にし得ていない、反差別（共産主義）論からの廣松理論との対話による深化・展開を試みようとしていることです（註）。

廣松さんは1933年生まれで、共産党の党员から60年安保に向けて新左翼が生まれてくる中に身を置き、運動的などころにも関わりつつ、アカデミックのところにも集中していったひとです。元々運動と理論——学を両立的に求めていたのですが、アカデミックな世界に集中し、その理論は闘争宣言とも言いえる内容になっています。

いろんな分野に及ぶ厩大な著、そしていろんなひととの対談や雑誌への投稿をなしてきました。そのノートを書くとなると、厩大な分量になるのですが、わたしはそもそも力量的におぼつかなく、また時間的にも書ける時間は限られています。ですので、骨格となる主要著書をまず押さえてから、各分野を押さえていく作業をします。途中で計画自体を見直すことも出てくるとも思いますが、まずアウトラインを出してみます。

まず、今回のこの『唯物史観の原像』、この著をわたしが真っ先に取り上げたのは、廣松理論の入門書的位置を占めていると押さえていたからです。後に、入門書的なことを新書のようなことでいくつも書いているのですが、わたしが廣松さんとの対話を始めた時には出ていなかったし、廣松さんが自ら書き始めたときには、これが入門書的にあったと押さえているからです。

次回からは（2）『世界の共同主観的存在構造』（3）『事的世界観の前哨』（4）『物象化論の構図』（5）『もの・こと・ことば』（6）『弁証法の論理』（7）『存在と意味（1巻）』（8）『存在と意味（2巻）』。ここまでが骨格学習。その後は各分野の学習に入ります。一応の構想があるのですが、多分変更することになりそうなので、また後で書くことにします。

さて、廣松さんは死後に廣松シェーレのひとたちが著作集編集委員会のようなことを作って、予約出版で岩波書店から出した全16巻の『廣松渉著作集』があり、それに載せられなかった論文を集めた全6巻の情況出版発行の『廣松コレクション』があります。それに沿って読んでいくという方法もあるのですが、廣松さんはドイツ語、英語、フランス語、ギリシャ・ラテン語、また余り使われていないような漢字も使って文を書いていて、わたしは廣松さんの本を読むにあたって、図書館で数冊の辞書を脇において読んでいて、最初に読んだ本に書き込みをしているので、それを使っての再読とします。わたしが『資本論』を最初に読み通したときにやった節ごとの二度読みを今回もやるつもりです。ほんとは、最初は真っ白の著作集を使い、再読本で二度目を読むとすればいいのですが、本を2冊も抱えて動くのは大変になっているので、再読本1冊で済ませます。また、再読本を読んだから、著作集の解説や解説も再読することにします。

長い前置きはここまでです。本書に入ります。

最初に目次を挙げます。

唯物史観の原像・その発想と射程 目次

はしがき

第一章 唯物史観の確立過程

第一節 哲学的人間学から社会的存在論へ

第二節 市民社会の「経済哲学」的分析へ

- 第三節 疎外論から「物象化論」の地平へ
- 第二章 唯物史観の根本発想
  - 第一節 唯物史観の基軸的発想と基礎的範疇
  - 第二節 階級闘争史観の基礎づけと歴史法則
  - 第三節 社会の生産的協働関態と階級国家
    - [補遺] レーニンにおける国家論の射程
- 第三章 唯物史観と革命思想
  - 第一節 ユートピアから「科学的社会主義」へ
  - 第二節 革命主体の形成と大衆運動の物象化
  - 第三節 共産主義革命の人間＝存在論的射程
- あとがき

さて、この論攷を著者の総体的作業の中で、どのように位置づけられるのかを考えていたのですが、廣松シェーレの『著作集』の編集方針では「第9巻 エンゲルス論」の中に位置づけられています。これは、エンゲルスの論攷をより多く引いているところと、廣松さんが編集構成作業をした『ドイツ・イデオロギー』の中でのエンゲルス主導説から来ているのでしょうか、まず一つ目に、わたしはむしろこの著は廣松理論形成のプロレゴメナ（序文・序説・序論）的などところで位置づけています。これは、「**第一章 唯物史観の確立過程**」「**第三節 疎外論から「物象化論」の地平へ**」で展開している廣松理論の核心的なことを押さえる作業になります。わたしがこの著を最初に取り上げている趣旨でもあるのです。

二つ目は、唯物史観のとらえ返しの作業です。廣松さんが唯物史観を取り上げている書を、小林昌人さんが『著作集9巻』／「解題」で三つ挙げています。この本、『生態史観と唯物史観』『唯物史観と国家論』。この唯物史観の宣揚と言うことが、この「**第三章 唯物史観と革命思想**」で取り上げているところですが、唯物史観からとらえ返すという作業がアナキストや空想的社会主義批判に肝要になっているのです。マルクス共産主義論の要になることなのです。これは「唯物史観」を取り上げている書を読んだ後に、『新左翼運動の射程』『現代革命論の模索』などの学習、「運動論の学習」という課題に入っていくこととなります。

三つ目、マルクスの思想形成過程です。廣松さんは青年ヘーゲル派の内部論争からマルクス／エンゲルスが自分たちの理論を形成してきたと分析しています。まさに「**第一章 唯物史観の確立過程**」でとりあげていることですが、これは廣松さんの『エンゲルス論』『青年マルクス論』『マルクス主義の成立過程』『マルクス主義の地平』『マルクス主義の理路』『マルクスの思想圏』のという一連の著作に繋がっています。これは『著作集』では8巻10巻11巻でとりあげられています。これを強調するとなると、わたしの次の学習は、初期マルクスの研究となり、最初に書いている読書計画で課題としてあげておくと、「初期マルクス／エンゲルス研究」ということになるのだと思います。これは一応、基幹学習を終えた後に織り込みます。

さて、最初にわたしは廣松さんの本を読んでいて、はっきりした自覚もないまま廣松理論を援用した文を書いていたのですが、今回再読して、ここで学んだことが後の展開の種になっているというようなことがいくつかありますので、それを項目を四つあげて切り抜きメモを残して置きます。

#### (1) 因果論批判

「上部構造なるものと下部構造なるものとの因果的規定関係——物象化された相ではそのように見えるが、原理的な場面で言えば、それは存在拘束性の屈折した投影にほかならない——を悟性的・機械論的に主張するものですらない。」104P

(エンゲルスの引用)「これらすべての契機の一つの相互作用なのであって、ここにおいては結局のところ、無数の偶然事を通じて、経済の運動が必然的なものとして自己を貫徹するのである。」106P・・・「相互作用」は廣松理論の深化の中では「相作論的關係性」として読み解けること

#### (2) 高分子・錯分子的構造

「生産的協働関係は、歴史的現実においては決してアトム的諸個人の単層的な聯関ではなく、一定の機能的分業の聯関態をも現実的な単位としつつ、その高分子的結合・錯分子的複合態の複雑な有機的総体を形成している。」119P

#### (3) ゲゼルシャフト——ゲマインシャフト

「先行社会主義の未来社会像は、結局のところ、近代市民社会（「ゲゼケルシャフト」のルビ）の原理を超えていない。・・・これに対して、マルクス・エンゲルスは、われわれが既に第一章でみたごとき経緯にも授けられて、真のゲマインシャフト——諸個人が全体に埋没する前近代的な共同体でなく、近代における諸人格の“自律”を弁証法的にアウフ・ベヴァーレンしたゲマインシャフト——即自対自的な協働聯関態としての人倫共同体、この新しい人間—社会観の地平に立って、近代市民社会の社会編成の原理を根底的に批判しつつ、そのことにおいて、同時に、その枠内にある先行社会主義のイデオロギーを批判的に超克したのであった。」178-9P

#### (4) 「本来の」ということの設定からする疎外論

「疎外論的発想においては、疎外されざる本来的な在り方、この在り方への頹落、その止揚としての本来的な在り方の回復、という図式が根底におかれる。・・・或る意味では、この疎外論のシェーマなるものは、そもそも現状否定を権利づけ、将来さるべき理想状態を基礎づけるための、非論理的なイデオロギー装置であるということすらできよう。」228-9P「本来性と称されるものは、実は自分の抱懐する理想状態の別名以上のものではなく、それが本来性と称されるものは、実は自分の抱懐する理想状態の別名以上のものではなく、それが本来的なものであるということの歴史的根拠はない。」230P・・・ポスト構造主義の「反本質主義」に通じること

さて、いつもなら全面的に切り抜きメモを残すところなのですが、冒頭に書いた三つの内容からなっていることを押さえたところで、二つ目と、三つ目はそれに沿った学習をするときに再度読み返すこととして、ここでは一つ目の「廣松理論形成のプロレゴメナ（序文・序説・序論）的などころでの位置づけ」として「**第一章 唯物史観の確立過程／第**

### 三節 疎外論から「物象化論」の地平へ」の切り抜きメモに留めます。

「しかし実際問題として焦点になるのは、『経哲手稿』で典型的に打ち出されているような疎外論の思想を、マルクスの思想体系とその通時的展開過程でどう位置づけ、どう評価するか、この点にあると言えよう。」 58-9P

「結論を先取りして言えば、一八四五年ごろを境にして、マルクスの思想的地平、世界観的「構えのとりかた」に飛躍的な発展がみられる。それは、しかも単なるマルクスという一人の思想家における飛躍という意義をもつにとどまらず、思想史的にみて、かつてデカルトが近代哲学の地平を拓いたと言われるのと類比的な意味において、新しい世界観的な地平を拓いたものとして劃時代的な意義をもつ出来事であった。マルクスは、単にヘーゲル学派的な枠を端的に超出したというにとどまらず、まさにそのことを通じて、デカルト以来の近代的な世界観の地平そのものを超克しつつ、それに変わるべき真に現代的な世界観の地平を拓いたといえることができる。（この問題について、またそこにおけるエンゲルスの参与については拙著『マルクス主義の地平』第一部を参覧ください。）／われわれとしては、この点に鑑みて、初期マルクスと後期マルクスとを区別する。この後期を、中期と狭義の後期とにさらに二分することも可能であるが、この二分はいま問題にしているほどの思想史的飛躍、世界観的地平の飛躍ではなく、マルクスという思想家ないし古典的マルクス主義という圈内での区分たるにすぎないと考える。／われわれは、この「初期マルクス」から「後期マルクス」への世界観的な構えの飛躍を、「疎外論の論理から物象化論の論理へ」という成句で象徴的に表現することができるであろう。」 61-2P

「後期マルクスのいう「物象化」は、主体的なものがストレートに物的な存在になるといった発想ではなく、人と人との社会的な関係があたかも物と物との関係であるかのように、ないしは物の性質であるかのように倒錯視されるという現象に関わる。」 63-4P

「こうして、近代哲学に表象された主体（人間）的なものの物象化という想念そのものが、実は間主観的関係の屈折した倒錯視に立脚するものとして対自的にとらえかえさるべきもの、そしてその物神性の秘密を究明さるべき与件たるにほかならない。マルクスは新しい地平を拓いたことにおいて、この秘密をはじめて真に究明しうる論理を構築したのであった。」 65P

「このかぎりでは、未展開のままであるとはいえ、疎外、物化の主体たる人間は、その類の本質に即すれば間主体的協働の一総体であるともいえるわけで、主体概念たる人間を「社会的諸関係の総体」として対自的にとらえかえしさえすれば——そのときには、人間の本質の物化とは「社会的諸関係の総体的連関」の物象的仮現としてとらえかえされうるから——後期の物象化論へと推転しうる構図だけは、すでに『経哲手稿』においても存立した、といえることができる。」 67P

「ここでは、もはや代表見本たる個的主体ないし『人間』と客体との直接的な関係からではなく、諸個人の社会的協働関係の自然生的な在り方から、「社会的活動の自己撞着」が説かれている。人間から独立な物象的な力ないし物象的なものとして現象するところのものは、実は、諸個人の自然生的な協働力ないし協働関係の屈折なのだということ、それはしかも、かかる屈折として物的根拠をもつものであり、単なる幻影ではないこと、この物象ゆえに、いわゆる「必然の王国」における歴史の法則性が存立するのだということ、この



種の認識がほぼ明瞭に語られている。」 71P

「疎外論の地平から物象化論の地平への飛躍、これが唯物史観の視座設定と相即する。このことについては、本書の行論が次第に明らかにしていく筈であるが、さしあたり一言しておけば、諸個人の間主体的協働の弁証法的総体が物象化された現相で「固有の道順を辿る」ことにおいて歴史の法則性が措定されるのだということ、この一事に留意を求めれば思い半ばに過ぎるものがある。／「歴史とは、個々の世代の連続的交替にほかならない。どの世代も先行する世代から贈られた素材、資本、生産力を活用するのであって一面ではまったく変化した状況下で継承した活動を続行し、他面ではまったく変化した活動で旧来の状況に変様を加えていく」わけであるが、この「社会的活動の自己膠着」において歴史が歴史として進展する。／この視座に立って歴史の構造と法則を把握するもの、それが *Die materialistische Auffassung der Geschichte* 唯物史観＝歴史の唯物論的把握にほかならない。／唯物史観は、しかし、狭義のいわゆる“歴史”観ではない。それは、単に「同時に社会観でもある」といっただけでは尽くせない。それは、或る意味ではマルクス主義の世界観そのものであるということが出来る。」 72-3P

「この「歴史化された自然」、そして物象化的に「自然化された歴史」という思想は、『神聖家族』においても、すでに「人間から切り離して形而上学的に改作された自然」ならびに「自然から切り離して形而上学的に改作された精神」を両面的に批判しつつ、これら両者をそれぞれの原理とする一面的な立場を弁証法的に止揚する見地を標榜するというかたちで、萌芽的に現れていた。それがいまや人びとの社会的生産活動、この「対象的活動」を視軸にして明確に措定されるに至ったわけである。／この視座に立つ以上は——第二次的な下位分類としてならば話が別になるが——原理的な場面では、自然観と歴史観が併立するのではなく、「歴史化された自然」の総体を射程におく唯物史観は、世界観そのものを相覆うわけである。」 74P・・・『生態史観と唯物史観』参照

「唯物史観は、まさしく、この「真実の世界」の「単一の。全体的な、歴史的存在界」の「観」 *Auffassung* であり、この意味で世界観そのものである。」 75P

「しかし、フォイエルバッハにおいては、ヘーゲル的な神秘主義的な精神＝自然の統一を破砕したという面が強いし、両者の統一が積極的には立言できない構造になっていたことは否めない。これに対して、マルクス・エンゲルスは、生産という協働態、つまり、労働という対象的活動に着目することによって、——ヘーゲル的な神秘主義に逆転することなく——自然と人間との有機的な媒介的統一の構造をとらえることができた。／この「生産」という対象的活動の協働態は、まさしく自然を歴史化していく力動的な過程的連関であり、ここに拓ける自然は「産業と社会状態の産物」として、人間的営為との被媒介的統一態において現前するわけである。」 77P

## 『著作集』解説・解題&その他別編集版との対話

### 「解説」

廣松シェーレで編集委員会を作っていて、それぞれの専門性で解説を書いています。この巻は佐々木力さん。廣松さんの科学哲学の講座を次ぎに担ったひとで、トロツキーの研究者としても有名です。

いきなり切り抜きメモに入ります。

「このたびの“わが著書”は、私なりに理解する唯物史観の輪郭をいわば一筆書きしたものであって、マルクス主義を私なりに再構成していく作業の第一着手ともいうべきものである。」(小林昌人編『廣松渉哲学小品集』岩波書店、同時代ライブラリー、一九九六年、二三六ページ) 588P

「マルクス主義のすぐれた“教科書”として学習会で多用されたと聞く。」 588P

『唯物史観の原像』は、「ロシア・マルクス主義」に対して「唯物史観」こそが古典的マルクス主義の中軸学説であると宣言し、「西欧マルクス主義」に対しては、「疎外論」は初期マルクスの“未熟な”議論には見受けられても、『ドイツ・イデオロギー』を執筆することによって従来の「哲学的意識を精算」してのちは止揚されたものの見方であることを主張して、「ラプソディー」との決別をうたった書であった。これらの思想形態に対抗して廣松自身が唯物史観の新解釈のキーワードとして打ち出したのは、「物象化」という概念であった。」 588-9P

『唯物史観の原像』における「物象化論」には以後の議論には看不られる視野の広さと生気がある。」 589P

「「疎外論から「物象化論」の地平へ」の移行に関して注記しておくべきことは、二つある。」

①「この移行の主役はマルクスではなく、むしろエンゲルスであった、……………」 590P

②「「疎外論」の位置づけ」——「ヘーゲルとは異なる仕方で理解されるようになっているのである。換言すれば、マルクスは「疎外」概念を単純に放棄したわけではない。成熟したマルクスが放棄したのは、ヘーゲル的な「自己疎外論」であった。」 591P

「**解題**」は廣松理論の文献的整理に力を発揮していて、岩波文庫版廣松渉編輯『ドイツ・イデオロギー』の補訳者にもなっている小林昌人さんです。

「**月報 12**」

・加藤晴康「「オールド・ボリシェビキ」廣松さん」

この巻に付いている「月報 12」の東大駒場の後輩の加藤晴康さんの文で、廣松さんを「オールド・ボリシェビキ」と称しているのですが、このあたりは、廣松さんにはレーニン・ボリシェビキ批判があって、早計ではないかと思えます。

・勝守真「廣松渉さんとの“遅れた”出会い」

勝守真さんの廣松さんの最後の文とも言える「東アジアの……………」という朝日新聞に掲載された文に対して衝撃を覚えたということを書いています。勝守さんは『相対性理論の哲学』勁草書房 1986 の共著者。

・新谷弘之「渉少年の思い出」

郷里での幼い・若い時代の廣松さんのことを小・中・高と同窓であった立場で思い出的に書いています。

(註)

わたしの反差別の立場からの廣松理論との対話は

たわしの読書メモ・・ブログ 601

・牧野雅彦「アレントとマルクス（前）」（『思想 2022 年第 3 号（1175）』岩波書店 2022 所収）「アレントとマルクス（後）」（『思想 2022 年第 4 号（1176） 特集 <共生>の思想』岩波書店 2022 所収）

この雑誌論文は、読書メモ 594 でとりあげた雑誌『科学』の小児甲状腺がん特集を読んだ際、同じ岩波書店の雑誌『思想』を宣伝していたので、その目次で見た辰己論文に関心をもち、雑誌を買い求めて読み、読書メモ 596 を書いたのですが、その『思想』で見つけた論文は、当該の論文「（後）」だったので、ひとつ前の「（前）」の雑誌も買って二つとも読みました。586-8 のアレント『全体主義の起源』三部作学習の続きという意味ももっています。

最初に目次をあげておきます。

## 目次

- 1 マルクスと「人間の条件」——問題の所在
- 2 労働——自然と人間の再生産
  - (1) マルクス——人間と自然の物質代謝
  - (2) アレント——「労働からの解放」の行方
- 3 仕事
  - (1) 制作と工作物——自然の循環に対する抵抗
  - (2) 制作過程の変容
  - (3) 変革の原動力としての機械制大工業
  - (4) 工作人と交換市場
  - (5) 世界の永続性と思考
- 4 行為
  - (1) 第二の「出生」とダイナミズム
  - (2) ポリスの創設と「権力」の概念
  - (3) 「潜勢力」概念の継承と断絶
  - (4) 行為の極限としての「許し」と「約束」
- 5 残された問題——行為の復権と思考の再定位

これは、わたしが身を棹さしているマルクスの流れからすると、今村仁司さんの仕事論、「マルクス主義フェミニズム」が突き出した、労働——家事——個人的営為の分離批判と対話していくこととなります。著者がアレントのマルクス批判の書として『人間の条件』をあげていて、そこからの引用文もあり、この本も読まないとうとうもないので、次の読書メモでとりあげます。で、それを読んでからこの読書メモも書こうかと思ってもいるのですが、とりあえず、暫定的に簡単なメモを残して置きます。

目次を見てもらうと分かるのですが、労働、仕事、行為、と論じています。マル・フェミの三分割の押さえと表面的には似ているのですが、アレントの「仕事」は、労働を消費される生産活動ということに置くのに対して、単に消費されはしない制作的活動とされています。マルクス『資本論』の「不変資本」や「固定資本」という概念とつながっているかのようにもとらえられます。さて、アレントの議論は、どうも資本主義社会や産業社会、さらには分業と私有財産制の下での、それを普遍化し物象化したところでの議論となっているようです。たとえば、欲望の無限拡大性を「人間の本質」のようにとらえている節があります。マルクス理論では、生産を物質的生産・再生産、人間の生産・再生産、欲望の生産・再生産と押さえています。資本主義社会では欲望を煽り商品売りを追いかける社会ですが、それが永遠に続くような幻想にとらわれているようなのです。また、イリイチが突き出したサブシステム概念からする生産活動のとらえかえしなども、このことの相対化が進んでいますし、何よりも、今日的な環境破壊の現状から、科学批判をも含んだ論的な展開を押さえていくと、アレントの突き出している概念には疑問を呈さざるをえません。

後は『人間の条件』との対話の中で。

たわしの読書メモ・・ブログ 602

#### ・ハンナ・アレント『人間の条件』筑摩書房（ちくま学芸文庫）1994

この本は、前回の読書メモで取り上げていた著作で、そしてアレントの『全体主義の起源』という三部作の関係で積ん読していたものを引き出してきて読んだものです。なお、音の文字起こし的には、『全体主義の起源』の著者名表記の「ハナ・アレント」やちくま学芸文庫シリーズの著者名「ハンナ・アレント」があり、この本の訳者はそのままと表記すると「ハナー・アレント」に近いとしているのですが、読書メモなので、ここでは、この本で使われている表記の「ハンナ・アレント」で通します。

さて、この本は前の読書メモ 601 で書いたように、アレントのマルクス批判の書とされているようです。ですが、わたしにはとても批判になっているとは思えません。

そもそも 19 世紀には哲学は神の死を宣言しました。そのことを覆す、そのことの批判なしに、神という論理でアレントは論攷を進めています。そして、「キリスト教信仰を掘り崩したのは、一八世紀の無神論でもなければ、一九世紀の唯物論でもなかった。これらの思想は、粗野なことが多く、ほとんどの場合、伝統的神学によって簡単に反駁できるものである。キリスト教信仰が崩れたのは、むしろ本当に宗教的な人びとが救済にたいして懐疑的な態度をとったためであった。彼等の眼から見て、伝統的キリスト教の内容と約束は「不条理」なものとなっていたのである。」495-6P とまで書いているのですが、マルクスのところから整理すると、「自然の不可知性の物象化とその絶対化＝神」ということで、別の言い方をすると「神は共同幻想の極」ということで、議論はおしまいなのです。そのことに反論できるのでしょうか？

そもその前提からの対話が必要で、そのことなしには砂上の楼閣を描くことになりません。

もうひとつは、アレントはギリシャ・ローマ時代の労働概念を引き合いに出しているのですが、これは奴隷制度の上に立つ市民社会で、ひとつの「民主主義」とも評することができます。奴隷制度など19世紀には論外のことで、そんなところでの労働概念を持ちだしてくることは、「おぞましい」としか言い様がありません。このあたりは、ナチスの思想的基盤を形成したハイデggerとの関係をアレントが精算し切れているのか、ということにも繋がっていきます。また、ギリシャ——ローマ的なところから西洋文化の流れからするヨーロッパ中心主義のようなことを、サイードが『オリエンタリズム』で批判したことともつながり、ヨーロッパ知識人の抑圧性をも指摘できます。被差別者側からでなく、差別する側からとらえたことで、また、ヨーロッパ内部でも、被差別者側からみた文化・思想のとらえ返しが必要になっているのだと思います。

このあたりは、そもそも前の読書メモで主題になっていて、この本でも大きく取り上げている労働概念を巡る議論ともつながっていきます。アレントは、労働——仕事——活動（前の読書メモでは「行為」となっています（註1）、というところで、労働と活動概念の分析をしています。そもそもマルクスの労働概念が搾取というところと密接につながっていることは一応押さえているのですが、エンゲルスが『イギリスの労働者階級の状態』で描いた苛酷な搾取しか搾取としてしかとらえていないようです（註2）。マルクスの中における「労働からの解放」という概念は、搾取からの解放ということを主題にしていることで、生産活動そのものを否定しているわけではないのです。その生産活動ということ、仕事ということにとらえ返していく必要があります。このことで、アレントは欲望の無限的増大というようにとらえているのですが、それはとりわけ資本主義社会における生産が、商品生産と類的生产（労働力の生産・再生産）、欲望の生産ということでセットになっていることを、ヒトの自然的なこととしてとらえる物象化におちいっているのです。ですから、ディストピア的なところに陥ってっていくのです。今日的には、科学批判ということも含んだエコロジー的概念をもった、イリイチのサブシステム概念からする欲望の無限的拡大ではない仕事のとらえ返しが進んでいるのではないのでしょうか？ アレントは、ディストピアとしての環境破壊の問題とかをとりあげているのですが、そもそもそれを「ひとの性（さが）」のようなこととしてとらえているような感じなのです。まさにこれも「ひととひととの関係を自然的なこととしてとらえる」物象化なのです。

アレントは、労働からの解放と労働崇拜的なことのマルクスの労働概念の混乱かが起きているというようにとらえ返しをしているのですが、これは、マルクスが初期中期まで、生産力の増大と生産様式の間における矛盾における革命の可能性を見ていたところで、労働ということに留目していたことがあったのですが、後期マルクスは「古代社会ノート」などの研究により、新しい可能性をとらえ返しています。このあたりは、今村仁司さんの文化人類学的なとらえ返しにおける労働概念から仕事概念への転化の問題にも繋がっています。実は、エコロジー的概念とも結びついたイリイチのサブシステム概念ともリンクしていきます。これはアレントの「活動の序列化」、芸術や政治的活動に対する過大評価、活動のヒエラルヒー的に上位に置くことは逆に相容れないことになっています。むしろこれもアレントも少しはとらえ返そうとしていることなのですが、エコロジー的・反科学主義的なことにリンクしていくことです。

ひとの生きる営為の三分割——労働、家事、個人的営為——ということ自体からとらえ返すことをフェミニズムや反差別論の論攷は提起しています。また、この本のタイトル「人間の条件」ということに関して、『人間の条件 そんなものない』ということタイトルにした本も障害学サイドから出ています。価値付け、それは優生思想に繋がることとしての批判なのです。

さて、前の読書メモにおけるマルクスとの対話のはなしです。アレントにはマルクスを理解しているとは言い難い、とりわけ物象化概念がないのです。労働ということを巡っても前述しているように、マルクスの搾取という概念をおさえきれていないのです。

ただ、ギリシャ——ローマ時代からもとらえ返した西洋哲学史のようなこと、興味深いこともあるのですが、いやむしろ、西洋中心主義の、しかも仕事を序列化するような価値観にとらわれてしまっているところでの、アレントの限界性も感じてしまいました。

さて、最後に目次を上げておきます。

## 目 次

### プロローグ

#### 第一章 人間の条件

- 1 <活動的生活>と人間の条件
- 2 <活動的生活>という用語
- 3 永遠対不死

#### 第二章 公的領域と私的領域

- 4 人間——社会的または政治的動物
- 5 ポリスと家族
- 6 社会的なるものの勃興
- 7 公的領域——共通なるもの
- 8 私的領域——財産
- 9 社会的なるものと私的なるもの
- 10 人間的活動力の場所

#### 第三章 労働

- 11 「わが肉体の労働とわが手の仕事」
- 12 世界の物的性格
- 13 労働と生命
- 14 労働と繁殖力
- 15 財産の私的性格と富
- 16 仕事の道具と労働の分業
- 17 消費者社会

#### 第四章 仕事

- 18 世界の耐久性
- 19 物 化
- 20 手段性と<労働する動物>
- 21 手段性と<工作人>

- 22 交換市場
- 23 世界の永続性と芸術作品

## 第五章 活動

- 24 言論と活動における行為者の暴露
- 25 関係の網の目と演じられる物語
- 26 人間事象のもろさ
- 27 ギリシャ人の解決
- 28 権力と出現の空間
- 29 <工作人>と出現の空間
- 30 労働運動
- 31 活動の伝統的代替物としての製作
- 32 活動の過程的性格
- 33 不可逆性と許しの力
- 34 不可予言性と約束の力

## 第六章 <活動的生活>と近代

- 35 世界疎外
- 36 アルキメデスの点の発見
- 37 宇宙科学対自然科学
- 38 デカルト的懐疑の勃興
- 39 内省と共通感覚の喪失
- 40 思考と近代的世界観
- 41 観照と活動の転倒
- 42 <活動的生活>内部の転倒と<工作人>の勝利
- 43 <工作人>の敗北と幸福の原理
- 44 最高善としての生命
- 45 <労働する動物>の勝利

## 謝 辞

### 訳者解説

### 文庫版解説（阿部齋）

#### （註）

1 これは訳の問題なのでしょう、ただ、活動のところがプラクシス——実践とするか、労働概念には収まらないアクティビティ——活動とするかの問題があり、そもそもひとの活動が、労働——家事——個人的営為というところに三分割されていく構図をとらえ返す必要があります。そこから、政治的活動や、芸術活動の特権化、ヒエラルヒーの上位に置くというアレントのインテリゲンチヤ的抑圧性の問題も出て来ているようです。

2 国家の暴力装置としての性格と共同幻想としての性格と同じように、労働中毒とまでいわれるような搾取される労働に生き甲斐さえ見出していくようなことがあるにせよ、マ

ルクスが実質的包摂と分析したような賃金奴隷制の性格が、資本主義社会ではなくなるわけではないのです。

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 123 号」アップ(22/9/18)
- ◆メインの「反障害——反差別研究会」のホームページ不備・校正があり、かなり大幅な更新をしました。今号の最後に掲載している、「Ⅲ.「会」の当面の研究・執筆課題 (2022.5 全面改定)」を新たに書いています。ホームページ校正したところは、ホームページを見てください。訂正箇所はしばらく赤字にしています。
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」も DVD などの他のメディアでの郵送などで対処したいと思っています。横書き版は最後、の連絡先から連絡をお願いします。
- ◆「反差別資料室 C」で、また見れない文書が出ています。とりあえず、タイトルの最後に「反障害通信」の掲載号数を書いていますので、メインホームページの「会報」の当該通信号から見てください。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」を、新しい本の購入や読書に合わせて、一年ぶりにリアップしました。

## (編集後記)

- ◆今回も、なんとか定期刊行が守れました。以前母の介護で不定期刊というよりお休みになっていた時期があったのですが、それと同じ状況です。ただ、不定期刊になってもそんなに長くはないのですが（長くなればそれはそれでいいことなのですが）。
- ◆巻頭言は、「そもそも」シリーズで、以前「ファシズム」をとりあげました。その修正・整理のようなことです。旧統一教会のカルト的ファシズムのことも展開しました。
- ◆読書メモは、「廣松ノート」にとりかかりました。それと併行して巻頭言に合わせたハンナ・アレント関係二冊です。
- ◆旧統一教会と安倍元首相の国葬問題であきらかになってきたことは、自民党自体がカルト化していることです。それにしてもカルト的な宗教がなぜにも広がっていくのか、それは靖国神社や国家神道や日本会議の流れにも通じていることで、日本型ファシズムの核になっているのではとも想起しているのですが。
- ◆岸田首相の国葬にする説明の核心は、八年八ヶ月長期政権を担ったという話ですが、もっと長く担ったヒトラーやスターリンは国家的に哀悼される存在なののでしょうか？
- ◆次回分は、出すのを迷っているひと号分の原稿だいたい書き上げているのですが、迷って出せなくなったら、一回お休みになるかもしれません。何とか定期刊行態勢を守りたいとも思っています。



## 反障害－反差別研究会

### ■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

### ■連絡・アクセス先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp) (三村洋明)

反障害－反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>